

教育上の問題点についての座談会

は じ め に

平成 13 年 5 月 11 日（土）に文教会館で本年度総会が開かれ、そのあとで例年どおり「教育上の問題点についての座談会」がもたれました。昨年までの話題は主として「教科内容の削減」と「履修科目の減少」でありましたが、今年は昨今話題の「学力低下」でありました。会場での発言を中心に誌上フォーラムとしてまとめ今年も I C E レターに載せることになりました。今年は趣を変えまして、e-メールでやり取りして Q and A 形式にさせて頂きました。なにかとお忙しいところご協力いただきました著者の方々にあつく御礼申し上げます。しかし編集の下手際でかならずしも著者のおっしゃりたいことが十分には引き出せなかった感じは否めず心残りであります。

(宮城 陽)

小 学 校 の 現 状

紙 谷 威*

Q： 小学生の学力は低下しているのでしょうか？

A： 低下しているとは限らない、ただ言えることはできる子とできない子の差が広がっているようだということです。

Q： 差が広がっている原因はなんのでしょうか？

A： 以前にくらべると本が豊富になりました。親も裕福になり子供に買い与えます。図書館も整備されました。インターネットを使いこなす子供もいます。要するに情報源が豊富になったのです。だからできる子はどんどん知識がふえるのです。

Q： 学習に集中していますか？

A： 学習に集中させることのできる教師は少なくなってきたように思う。

Q： なぜできる教師が少なくなったのでしょうか？

A： 一つには集中できない原因が以前にくらべて多くなって、そのすべてに対応できる教師はそんなに多くないからでしょう。

Q： 児童が学習に集中できないわけは？

A： 原因はいくつも考えられます。一つ目は児童の生活習慣が夜型になっています。これはテレビの番組が以前にくらべてより豊富で魅力的になっていることもあります。また大人の夜の生活が豊かになってこれに引きずられるということもあります。

二つ目は児童がわがままになり過ぎていることです。少子化による甘やかし、それと子供に強制してはいけないという社会風潮などの影響でしょう。

三つ目は保護者が教育に自信がないというか、不安を感じたままで指導していることです。先のことと関係しますが、「躾なければ」と思うと同時に「強制はいけない」とも思い、気持ちが揺れています。子供は敏感ですから、すぐに影響されます。

四つ目はクラスの児童数が多過ぎることです。以前は1学級50とか40人でした。いまは30人くらいでしょうか、学校によって違いますので、一概にはいえませんが。たしかに以前にくらべれば減っています。それでも多すぎます。以前にくらべていまの児童はわがままに集団行動が弱く、まとまって学習することが困難です。教師の指導力・統率力の不足も一因でしょうけれど。

Q： そもそも相手が子供にかぎらず大人でも、1人が掌握できる人数は20人くらいでしょう。30人は多すぎると思います。五つ目は？

A： 五つ目は教師に時間的な余裕がないことです。一日のスケジュールがぎっしり詰まっていて、教師に空き時間がありません。ほとんどの教師は時間外勤務をしいられています。そして昨年度から始まった各学校の自主カリキュラムの作成や総合的な学習の時間の計画などせねばなりませんし、さらに学校内外の研究会・研修会があり、そのうえ書類の提出も以前に比べて数段多くなりました。これでは児童にゆとりを持って学習させるための教材研究も不十分になります。とにかく忙しいです。

* かみや たけし 金沢市立東浅川小学校 920-1145 金沢市浅川イ 130

- Q： 児童の学習に対する意欲はありますか？
- A： 児童は好奇心の塊、教師の能力でいくらでも伸ばさせることができます。しかし、そののばす教師の力量にすごく差が出て采ました。
- Q： なぜ差が出てきたのでしょうか？
- A： 教師の指導力の低下しているからでしょう。学級経営の未熟，学習の躰（教師の発言を注意して聞く習慣など）の不足，教材研究の不足などです。
- Q： なぜそれらが不足なのでしょう。「昔はよくて今はわるい」では少し納得できないのですが。
- A： さきにお話した親の精神的姿勢と重複しています。躰を徹底するにはどうしても強制的というか押さえつけ形になります。昔は親も教師も押さえつけ形が多かった。いまは親だけでなく教師も「躰なければ」と思う一方「強制はいけない」とも思いゆられています。教材研究の不足はさきほどの教師の忙しさと関係があります。忙しいと、どうしても教材研究は後回しになります。
- Q： わがままな児童の指導はどうしたら良いのでしょうか？
- A： 気長に指導するしかありません。クラスの決まりや学習の決まり（聞き方、見方、話し方の基本）をくりかえし教えて、しっかり身に付けさせることです。
- Q： 学習に意欲を持って取り組ませる方法は？
- A： 子供の興味や関心にあった教材が提示できるように，教材研究を深めることです。昔も今も変わらぬ教育技術の基本です。しかし子供は時代とともに変わっていきますから，昔よかった教材が今日でもよいとはかぎりません。だから常に教材研究を怠らないようにしなければなりません。ところが先にお話しましたように，忙しいと後回しになります。とにかく，研究会や研修会そして書類をつくるのが近頃急に多くなってきました。これをなんとか減らしてもらいたいものです。

教科内容の改定 たとえば中学校の場合

宮 城 陽*

Q: ちかごろ「学力低下」が話題になっていて、その原因として理科の授業時間数の減少があげられていますが、これについてどのようにお考えですか。

A: これは重大問題でなんとか元通りにしてほしいです。しかし、教科書の構造を見直して、少なくなった時間で基本的知識が習得できるように化学界は努力するべきでしょう。なぜなら、ICE レターの前号にも記したことですが、化学は今後も発達しますから教科内容もまだまだ増えます。授業時間には限りがあるので、内容をむやみに増やすことができません。どこかで整理しなければならない筈です。

Q: それは可能ですか。すでにくりかえし精選や簡素化しても効果なかったのですが。

A: 可能だと思います。中学生の基礎知識について調査したところ、原子・分子についての知識獲得度は高いのです。しかし全体の中から原子・分子について正しい知識をもっている集団を抽出して、「水は H_2O で表される分子の集まり」と「水は酸素の分子と水素の分子の集まり」についての正否を問うと{両方とも (誤答)}が約40%、{前者 後者×(正答)}が約30%でした。つまり H_2O が水の記号であることは知っているのですが、水がどんな粒の集まりであるかは分からないのです。原子・分子は分かっている生徒がですよ。それが約半分の生徒の知識です。

Q: 驚くべきことですね。なぜそんなことになるのでしょうか。

A: 教科書で原子・分子をあつかう章と水など物質をあつかう章は別々なのです。前者は2年生、後者は1年生で習います。中学校の先生の話では、それが頭の中でも別々のところに蓄えられていて、関連付けされないのためだということでした。またこれらに関連付ける章はないのです。分子・原子を勉強するのはそれを使って物質を理解するためです。分子は分子、物質は物質では分子を習う意義がなくなります。

Q: それと簡素化とどう関係するのですか。

A: 物質の性質は明治時代からある項目、だから理解しやすいので1年生で習い、原子・分子は昭和30年ごろからの項目だから難しいので2年生でとまっているのだと思います。ところが生徒にとって原子・分子の方が分かりやすいのです。だから1年生で原子・分子を教え、その知識を使って2年生で物質を教えた方が理解率は高いと思います。理解率が高ければ時間的にも短縮できるはずですが、さきほど辻本先生から「学習者に分かる体系化が大切であって教育する方が分かっているだけで受ける方はどうなるのか分からないようでは・・・」という話がありましたが、まさにその問題です。これは中学校の段階から始まっているのです。明治以来教科内容を膨らませてきました。余り膨らんでいない時は項目間の繋がりははっきり見えた。非常に膨らんでくると項目間の関係がわかり難くなってしまったのでしょう。ここらで教育方法や教科構造(構造です、教科内容ではありません)など質的に見直さなければならない段階にきているのだと思います。それは中学、高校、大学ともです。

* みやぎ よう 金沢大学名誉教授 920-0902 金沢市尾張町 1-2-36-301

学力低下の原因 高校の場合

浜本 信一*

Q： いぜんにはなかった「学力低下」などという成句が囁かれるようになりましたが、その原因はどのへんにあるのでしょうか。

A： 大学生の教科の中での理解不足の原因は、私にもよくわかりませんが、最近の高校生を教えていて強く感じている点を3つ挙げて、それを原因解明に役立てて頂きたいと思います。一つ目は国語力の低下。すべての学問の基礎力が、国語の読解力や作文力に比例していくと考えています。理系の生徒に小論文を書かしてみると、年々、論文の内容が幼稚になってきており、教師側が感心させられるような内容のものを書くことができる生徒がほとんどいなくなっている現状があります。(10年前はこちらが上手い、と思うものが少なくなかったのです。)小学校時代の読み書きの力の低下が尾をひいているのではないのでしょうか？

Q： 思っていることを相手に分からせるように表現する技術を習得させる、これを言語技術教育というのだそうですが、それを小学校時代からはじめる必要があるということですね。文学作品の鑑賞だけでなく(それも大事だけど)言語技術もしてほしい。つぎは为什么呢。

A： 二つ目は質問に来る生徒数の減少。定期テスト・受験前に質問に来る生徒の数が激減しています。授業態度は真面目になっていると思うのですが、自分で何とかして疑問点を解決しようとする姿勢に欠ける生徒が多くなっているようです。疑問があってもそれを口に出せず、また、人に聞くことをおっくうがる(また、恥ずかしがる)生徒が増えています。友人同士で教え合っていたり、塾・家庭教師等で疑問の解決を図ってくれればよいのですが……。

Q： 「質問したり答えたりして間違っていたら恥ずかしいから」というわけですね。多くの英会話の外国人教師が述べている感想で、これは日本の文化や社会習慣と関係することで根が深いですね。ただこれからは質問する技術のようなものを教えていかねばならないような気がします。先ほどの言語技術とも関係するのでしょうか。次は。

A： 三つ目は学習時間の減少。10年前、泉丘高校2年生の平日平均学習時間は約2.2時間であったと記憶しています。今年度は約1.7時間でしたので、約0.5時間の減少がみられます。(年々、この学習時間は減り続けています。)学習時間が減れば、基礎力・理解力の低下は当然の結果となるでしょう。

Q： これは深刻な問題です。ぜひもと通りの時間になってほしいものです。ところで今回の3割削減、厳選、の効果についてはどのようにお考えですか。

A： 平成15年度より、学習指導要領の改訂による新カリキュラムが実施されます。この改訂の目的は「学習内容を7割に精選することにより、全員の生徒が全内容を理解できるようにし(わからない生徒がいないようにする)、また、能力に長けた生徒には、その能力に応じた高度な内容のものを教えても良い」というものであります。さて、

* はまもと しんいち 石川県立泉丘高等学校 921-8116 金沢市泉野出町 3-10-10

これから高校で使われる新教科書を調べてみますと、その学習内容はあまり簡単にはなっておらず、高校で初めて出てくる言葉・内容が多くなるなど、義務教育の学習内容と高等教育の学習内容との難易差がさらに広がっていくように思われます。その結果、中学校との学習のギャップに苦しみ、ますます余裕を失っていく高校生の姿が私には予想されてなりません。また、基礎力が3割も欠けている高校生がさらに難しいことにチャレンジしていこうという気持ちになるとは、とても考えにくいことだと思うのです。大学入試の内容も今後変えられていくことが予想されますが、どのように変えられていくのかわからない高校の現場はますます混乱し、たとえ、飛び級ができるような優れた資質の生徒が出てきたとしても、高校側に改訂の目的の後半にあるような十分な学習内容をこの生徒に与えてやれる余裕があるかどうか、わかりません。

Q： 大学入試レベルは変わらずに、中学が3割削減ですとその分高校は過密化されるということですね。当然の結果ですけれど。最後に「大学に入る前にぜひこれだけは勉強しておいてほしいという目標が大学側から余り発信されていない」という声をききますが、これについてどのような感想をおもちでしょうか。

A： いまお話したような状況の中で、大学側が生徒に対する要望を発信することはとても大切な事ではないでしょうか。やる気・能力のある生徒に対して、高校ではこのような勉強をやっておいて欲しい、という発信があれば、彼らは持ち前の能力でそれを積極的に行ってくれるものと確信できますし、高校側も的確なアドバイスを彼らに送ることが可能になります。また、中学校との学習のギャップに悩む生徒に対しても、大学で学ぶにあたっての最低限必要なものを明示してもらえれば、彼らの悩みは多少なりとも解消されるに違いありません。不登校などに陥る生徒の数は毎年、確実に増加しておりますが、これらを減少させるためにも大いに役立つはずで、以上の理由で、私個人としては、大学側からの生徒に対する目標の発信は大いに歓迎すべきものと考えております。

学力低下対策 大学の場合

辻本 和雄*

Q： ちかごろ話題になっています「学力低下」についてどのような感想をおもちですか？

A： まず学力と記憶力の区別をしておく必要があると思われます。「学力低下」の一部として「生徒や学生にもともと記憶力はあるが、必要なものを記憶していない」ということが含まれているように思うのです。なぜなら、ここ 10 年ほどで人間の記憶力が急に低下したとは思えないからです。「必要なことを記憶していない」というのであれば、「学力低下は教育の仕方に問題がある」ということではないですか。学力低下は今までの教育に責任があることを認めなければ、議論の出発点でおかしくなります。

Q： 「教育の仕方」のどういうところに問題があるのでしょうか。

A： 今は IT によって情報を入れることが容易になり、疑問に対する答を早く引き出せる時代です。基本的知識を獲得したのち、これを利用して多くのことを引き出せるのが理想です。その引き出すトレーニング（教育）が行われず、教育の仕方が旧態然として、その場限りの記憶を問う問題ばかり生徒や学生に出されていてはたまったものではありません。

Q： その「記憶する必要のある知識」についてはどのようにお考えですか？

A： なにが基礎学力が教育界で検討されていない。

Q： それは中々むつかしいのではないのでしょうか。 大学についていえば、大学ごとに「要求する基礎学力」が違うのではないのでしょうか。

A： 大学毎によって「要求する基礎学力」が異なるというのであれば、大学の数だけ基礎があるということになります。それほど分化した基礎なら、それは基礎とはいわないでしょう。仮に、大学が要求する基礎があるなら、それを本にまとめて、大学入試や定期試験ではその持ち込みを認めるようにすればよい。未だに、記憶のテストを主体に大学の試験が行なわれていることをいいたいのです。大学が本来持つ機能を発揮するには、「学力」を育てることであって、記憶力を育てることではないはずで、少ない知識でより多くのことを学習する。これが基本です。

記憶すべき知識はその応用範囲によって異なるのは当然ですが、その体系化ができていくかどうかは問題です。つまり、学習者に分かる体系化が大切であって教育する方が分かっているだけで受ける方はどうなるのかわからないようではソップを向かれてしまうのは必然の結果です。

大学でシラバス（授業計画）が呈示され、教える方も教わる方も、今日の授業は全体のどこをやっているのか、何が基礎であり、どのように応用すればそれが分かるか、を学ぶようになってきました。このような個々の授業方法改善に対して、現場に関係しない者が（例えば、事務や外部者）体系化しようとすることがあります。重要なこ

* つじもと かずお 北陸先端科学技術大学院大学 923-1245 石川県辰口町旭台 15

とは成功例や失敗例をたくさん集めることです。新しい試みで授業をどのようにして進めたかということや大学の先生は知ることができません。大学入試も基礎事項の記憶試験にするなら、記憶すべきことをはじめから全て公表し、資格試験にすべきではないでしょうか？ 応用の試験をするなら、基礎事項をはじめから明らかにして、如何にそれを使ったかをみる試験に変えることが必要です。今、行なわれている入学試験では出題者が何を要求しているか分からないか表現されていない状況です。

Q： それが本来の入試の役割だったのですが、いまはランク付けのように誤解されて悪い面が強調されすぎています。

A： 上記にある通り。大学が受験生に対して、どのような勉強（記憶と応用）をして受験して欲しいという具体例が示されていない。大抵の表現は「いい学生」という大変理解し難い抽象的な表現でかわそうとしている。大学自身が官僚的表現をとり、解釈を受験生に任ずという責任逃れとも受け取れることをしている点を自省すべきと思われます。

Q： ちかごろは「嫌いな教科まで勉強させるからますます嫌いになる、好きなことだけ勉強させるのがよい」という風潮です。そのため勉強する分野が狭くなっているということが問題になっていますが。

A： 「嫌いな教科」という分類が純粋に教科の問題か今までの教え方の問題か考え直さないと、誤った結論に到達する可能性があります。純粋に教科だとすると、その教科の構成を考え直さないと始まらない。「理科は好きだが、数学は嫌い」「国語は好きだが、英語は嫌い」という変なことが現れてくるようになります。

近頃の大学生の特色なのかもしれませんが、やたら、分野を言いたがる傾向にあります。理科については「化学はやってきたが生物ははじめてですので、蛋白質はわかりません」とか「物理をやってきたので、電気はわからない」という変なことを言い出す。つまり、何かの言い訳に使っているのだと思いますが、これで、承知する風土があるのも困ったものです。それは大学の先生がそうしているということもあるのですから。

物・化・生の分野の多様化と境界分野の先端化により、何が基礎で、何が応用なのか学生も教官も理解するのが困難になっています。これは、「分野」を固定して考えるのではないことを意味しています。さらに、境界分野を学ぶ者には全てに基礎知識が明確にされ、それを必須にすべきことになる。このような方向を出す方が、分野固定や他分野排除よりも有効に働くと考えられます。

Q： 学力低下対策の一つとしての大学入学後の補習が話題になっていますが。

A： 学ぼうとすることに対して、補習だけが学生の求める姿ではないでしょう。たとえばオフィスアワーを利用して質問に行くとか、一つの疑問を徹底的に調べて、そのレポートを先生に提出するなど、いくらでも手段があります。学力を記憶にするなら、それは学問の体系ができていないことであり、教える側の責任です。学力を応用とするなら、そのやり方の例が示されていないので、手法の問題となります。これに対して、教官側はその解決にはなにを利用できるかという情報（表にして）を学生に与え

ておけば良いことです。従って、授業では「私なら、この問題に対して、これとこれを何々で調べて、解答します」という例を先生が学生に示してやるべきです。一般的な答えになりますが、教室だけが授業をするところではないということになります。

Q： しかし学生はなかなか質問にきてくれないのが現状ではないでしょうか？ 高校の先生もちかごろの生徒は質問にこないと言っておられます。質問の奨励策のようなものをお考えでしょうか。

A： 学生が無視している状況は単純ではありません。これについては一般的に言えることはすべて試みられていますので、有効性が乏しいことも実情だと思います。むしろ、数多くの例を示す方が適切だと思います。例について、は私の場合を示すことはできません。

質問を出さずには沢山の演習問題を与えて強制的に問題をやらすか、学生と一緒にあって、実験をしたり、問題を考えたりすることです。両極端の二つのことを偏りなくすることです。なぜなのか？ どうしてそうなるのか？ 学生に疑問を投げ、一緒に考えるのを勧める傾向にありますが、強制的に問題をやらすというのも、いい経験になると思います。相手が生き物ならそれにあつた教え方をするのは当然です。座して質問は来ないことも確かでしょう。

石川化学教育研究会

事務局 920-1192 金沢市角間町

金沢大学理学部化学科内 鈴木 正樹

Tel 076 - 264 - 5701 Fax 076 - 264 - 5742

ICE レター編集部

921-8105 金沢市平和町 1-1-15

金沢大学教育学部附属高等学校内 樫田 豪利

Tel 078 - 226 - 2154 Fax 076 - 226 - 2150

921-8116 金沢市泉野出町 3-10-10

石川県立金沢泉丘高等学校内 浜本 信一

Tel 076 - 241 - 6117 Fax 076 - 245 - 5253